

富田 恭彦著
科学哲学者 柏木達彦の多忙な夏
 科学ってホントはすっごくソフトなんだ、の巻

「一つの明
 ちが「難解」とか「深遠」
 るい予感を
 とが「根源的」といった人質
 感じさせる
 辞々に酔いしれて、自前の問
 本である。
 いと言葉をながしうにして
 といっても
 いた間に、「哲学」という言
 これは小説
 葉自体が一種の知的怠慢を表
 仕立ての科
 わす履称になってしまった、
 学哲学者入門
 というわけだ。

「しかし一方で、哲学はいま
 や一種のブームだそうであ
 る。確かに世界的にベストセ
 ラーになった「やさしい」西
 学の本、『ソフィアの世界』
 は日本でも好調に版を重ねて
 いるし、それにオウム真理教
 の一件以来、哲学や倫理の教
 育の重要性が叫ばれたりする
 こともある。しかしこうした
 現象の背後では、△素手で考

哲学および哲学教育の現状に
 ついて述べたのは、他にもな
 い本書は、二重の意味でそれ
 らと関連するからである。ま
 ず第一に、本書の舞台は著者
 が哲学の教師として勤務する
 に、本書は、西洋の哲学者の
 同時に、哲学の講義に本来の
 魅力を取り戻そうとする著者
 自身の現場での創意と工夫を
 垣間見ることが出来る。そし
 て第二にもっと重要なこと
 には、他者にかかわる者
 の生き方の問題にまで追いつ
 められる。多才な著者に注文
 を一つ。対話形式もいいが、
 次作ではぜひ小説、しかもで
 きれば推理小説そのものである
 ような哲学入門書を書いて
 ほしい。(しばた・まさよし
 氏 金沢大学助教授・現代哲
 学専攻)

小説仕立ての科学哲学入門書

自前の哲学的問いと言葉をもとに

柴田 正良



46判・241頁・2163円
 ナカニシヤ出版

口まねに終始していた古い世
 代ではなく、哲学の面白さを
 自分の問題設定と自分の言葉
 で語ることで出来る若い世代
 のものに属している。本書に
 登場するクーンやクワインや
 生。

そこには学説の死んだ解説は
 あっても、先生の生きた言葉
 がなかったからだ。哲学に面
 白みを感じて何の因果か大学
 で哲学を講じることになっ
 ってしまった評者にしても、わ
 わくするような興奮や眩暈の
 するような知的快感を得たの
 は、ほとんどが本や友人たち
 との議論からであって、大学
 の講義からではない。現在の
 文部官僚たちの哲学に対する
 イメージが彼らの大学時代に
 の講義の体験にもっぱら由来
 するとすれば、いままち哲学教
 育に対する政策レベルでの
 △攻撃は、大学時代に見た
 悪夢への彼らなりの復讐なの
 かもしれない。哲学の先生た

えるくまのしんどさをでき
 るだけ回避して柔な姿勢で
 「瘦されて」いたい、という
 無思考症候群がじりじりと進
 行しているように思われる。
 「どんな高尚な思想だって一
 皮むけばパンのための口実
 さ」と、誰もが大人ひた口を
 きいていたのだ。ま
 ちかかくも長々とわが國の
 な主題に遭遇するわけだが、

★とみた・やすひ氏は京
 都大学助教授・哲学専攻。
 京大大学院博士課程単位取
 得。著書に「ロック哲学の
 隠された論理」「クワイン
 と現代アメリカ哲学」「ア
 メリカ言語哲学の根柢」な
 ど。一九五二(昭和27)年